

公開セミナー アグリバイオ分野における知的基盤の今日と将来展望（第1回）

「GBIFと生物多様性情報の発信基地としてのアグリバイオ知的基盤の新たな展開」

地球規模生物多様性情報機構（Global Biodiversity Information Facility, GBIF）は、世界中の生物多様性情報を誰でも利用できるようにすることを目的に、現在、第2期（2007～2011年）の活動が展開されています。この取り組みに日本も参加していますが、農業分野での貢献は必ずしも多くありません。

しかし、農業環境技術研究所は農業分野で最も歴史のある昆虫微生物標本館を、農業生物資源研究所は配布可能な植物などのジーンバンクやゲノムリソースを、種苗管理センターは、わが国唯一の種苗法関連バイオリソースを有しており、これら情報をこれまで以上に様々な分野で活用することが望まれています。

そこで、本セミナーでは、GBIFの国際的な取り組み等を外部の有識者に紹介して頂き、平成23年4月に統合が予定されている3法人が有するアグリバイオ分野における知的基盤のより一層の整備と利活用について協議するため、7月13日につくば農林ホールで開催しました。参加者は行政、独立行政法人、大学、民間など130名でした。

第I部では有識者からGBIFの成立経緯やGBIFが目指すものについて紹介がなされた後、第II部では3法人から各法人の知的基盤の現状を報告しました。これらの報告に対して、会場からは、持続性を求められる知的基盤整備を競争的資金で行うことには限界はないか、情報をGBIFに提供する側としては、インセンティブが重要である、など今後の取り組みに関する様々な意見が出されました。

（農業環境インベトリーセンター長 対馬 誠也）



総合討論の様子

公開シンポジウム

「土壤微生物相の解明による土壤生物性の解析技術の開発
—革新的技術の農業現場での利用に向けて—」

高品質な作物生産を行う上で、安定した地力の確保や、連作障害等の病害の克服が重要であり、その実現のためには土壤の物理性、化学性、生物性を適切に把握する必要があります。土壤の物理性、化学性については、多数の知見が得られ、土壤診断の項目にも取り入れられていますが、生物性の評価は確立されていません。

このため、農林水産省では、平成18年度より、土壤DNA（土壤から培養過程を経ず得たDNA）の解析技術を取り入れ、生物性を評価する手法等を開発するプロジェクト研究「土壤微生物相の解明による土壤生物性の解析技術の開発」を開始し、土壤生物相の機能と構造や、作物生産性と土壤生物相との関連性の解析を進めています。

本シンポジウムは、4年間のプロジェクトの成果を広く理解してもらうため、9月10日に農林水産省本省講堂（7階）で開催しました。行政、独立行政法人、大学、民間などから172名の参加がありました。

第I部ではプロジェクト推進リーダー（農業環境技術研究所）ら3名から、全体の概要、世界の情勢報告、農業現場での技術の活用方策に関して報告がなされた後、



北海道農業研究センター、長野県野菜花き試験場の担当者から研究事例の報告がなされました。第II部では、ポスターによるプロジェクト参加者全員の報告や、解析装置の展示と本プロジェクトで開発した土壤DNA解析マニュアルについての技術相談コーナーが設けられ、それぞれ参加者と熱心な議論がなされました。本シンポジウムで特に印象的だったのは、多数の企業等（62名）の参加があり、本プロジェクトに関連した新産業創出も今後の課題となるように思われました。

（農業環境インベトリーセンター長 対馬 誠也）